

第1章 サブカルチャー教材の可能性

第1節 国語科におけるサブカルチャー教材の可能性を探る —教育現場へのアンケート調査に即して

1 アンケート調査実施の趣旨

「楽しく、力のつく」授業の創造、すなわち興味・関心の喚起と学力の育成は、すべての教科に共通する授業の基本的な目標である。子どもたちを学びへといざなうことは、教科担当者の責務と言える。しかしながら学習者の現実に目を向けたとき、彼らと学校の授業との間には深刻な距離がある。それは、序章第1節において紹介した佐藤学の『『学び』からの逃走』¹という言説に端的に示されている。この佐藤の指摘から7年を経た2007年現在、学習者の『『学び』からの逃走』の事態は、ますます加速されつつあるのではないか。学力低下やいじめの問題が教育現場に次々と浮上する中で、学校における授業のあり方が問われている。

事態への対応の一つとして、本研究では子どもたちが身近な場所で接している素材に目を向けることにする。「逃走」した子どもたちを強制的に「学び」の場へと連れ戻すのではなく、彼らが生活している「いま、ここ」という地平に「学び」を立ち上げることを考えてみたい。本研究では興味・関心を有する様々な素材に着目して、まさにその素材を通して国語科の「学び」が成立する可能性を追求する。それらは、漫画、アニメーション、音楽、映像、テレビゲーム、携帯電話など、一般に「サブカルチャー」として括られるものであった。多くは学校に馴染まないものとして排除されることが多かったわけだが、わたくしはかねてから教材として成立する境界線上に位置付け、「境界線上の教材」としての可能性を主として実践のレベルから探ってきた²。それは教材に関するパラダイムを見直し、可能な限り子どもの側に立つという視座から国語科の教材開発を目指すことにほかならない。教材開発は、常に学習者の実態に即して進められる必要がある。「『学び』からの逃走」を回避するために、まず教材開発という観点に立って具体的な展望を持つところが、本節において目指すところになる。

子どもたちの「いま、ここ」へとアプローチを試みるためには、彼らの現実に対する的確な理解が前提となる。子どもたちのいる環境に多様なメディアが急速に普及した今日、彼らの実態は確実に変容しつつある。テレビの普及に代表されるメディア社会の中の子どもと大人との関係について、本田和子は次のような指摘をした。

放映されるさまざまなメッセージは、目と耳を通して一瞬の隙に視聴者の手許に飛び込み、つかの間に離れ去って行く。現れては消えるその速度は、一つ一つをいわゆる「言語」に置き換え、「文字」を読むような仕方では理解する暇を与えない。そこで要求されるのは、提示された刺激に対する、直感的で一瞬の対応である。ここで、また、子どもたちは、文字文化世代の大人たちに対して、圧倒的な優位を誇ることになる。

(中略) テレビの普及を契機として、私どもの周囲から、従来のような意味での「子ども」は消えていきつつある。³

このような考え方に基づいて「子ども－大人関係」を見直し、新しい「子ども観」を確立する必要性を本田は話題にしたのである。本田の指摘を受けて、わたくしは教材に関するパラダイムを見直し、可能な限り子どもの側に立つという地平から国語科の教材開発を目指すことを考えることにした。教材開発は、常に学習者の実態に即して進められる必要がある。

国語教育の研究方法として、歴史研究の重要性は論をまたない。膨大な先行研究をつぶさに読み込んで、そこで明らかにされた様々な課題を整理し今後に生かすための研究は、まさに国語教育研究の基本となる。ただし、国語教育が常に「いま、ここ」を生きる子どもたちと直接関わるものである以上、歴史研究とともに実態調査もまた重視しなければならないと考えている。

子どもたちの実態に関する調査として、多くの資料が公表されている。それらのデータを参照しつつも、学習材開発という目的意識に立脚した実態調査を試みることにした。早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻で、担当する研究室に所属する修士課程の院生を中心としたメンバー4の全面的な協力を得ることができた。実際の調査は、中学校および高等学校の学習者および指導者に対して、アンケートの形態で実施したものである。2007年現在、3回にわたって実施し、それぞれの集計・分析結果は冊子にまとめて公表をした。そこで本節では、教育現場への3回にわたってのアンケート調査結果の概要を紹介しつつ、サブカルチャーと称される素材に関する学習者と教師の意識を明らかにすることによって、国語科の新しい教材開発の可能性についての提言をすることに主眼を置く。

なお便宜上、3回の調査をそれぞれ「第1次調査」「第2次調査」「第3次調査」と称することにしたい。特に第1次調査では、学習者の現実と漫画・音楽を中心としたサブカルチャーとの関連を追求することになった。本研究全体の研究課題と直接関連することから、その調査結果の記述を多くした。そしてその調査結果を補填するものとして、第2次および第3次の調査を位置付けることができる。

2 第1次調査＝「高校生のコミュニケーション及びサブカルチャーに関する意識調査」について

① 調査の概要

まず初めに2003年12月から2004年3月にかけて、当時修士課程2年に在籍した大学院生を中心とした調査チームを編成して、「高校生のコミュニケーション及びサブカルチャーに関する意識調査」を実施することにした。この第1次調査では特に高校生とその担当者に焦点を当てて、実態を明らかにすることを目標に据える。それは携帯電話というコミュニケーション・ツールが普及して、多くの高校生が所持しているという状況の中で、コミュニケーションのあり方に何らかの変容がもたらされているのではないかと考えられたからである。そこで実態調査の第一の目的を、高校生のコミュニケーションのあり方を明らかにするという点に置くことにした。特に彼らがことばとどのように関わっているのかという問題は、国語科担当者としては興味の尽きない問題であった。なお、子どものコミュニケーション意識に関わる先行研究として、田近洵一を研究代表者とする研究組

織による調査がある⁵。今回の調査は、これらの研究成果に多くを学びつつ、展開したものである。

まずはコミュニケーションに関わる調査を実施したうえで、広くサブカルチャーとして括られる身近な素材に対して、高校生がどのような意識を持っているのかという点を調査することを主な目標とした。なおこの調査では、特に漫画と音楽を具体的な素材として取り上げることにした。そこから高校生の実像を垣間見ることができればよいという思いがあった。彼らの現実を可能な限りの確に把握して、その実像に対応した教材開発を目指したいと考えたわけである。ことばのコミュニケーションの実態を探りつつ、サブカルチャーに関する意識を明らかにしたうえで、高校生の身近な場所にことばの「学び」を立ち上げるといった目的が、調査の背景にある。

調査は、まずアンケートの質問項目を吟味するところから出発した。後の集計のことにも配慮して、選択肢を設ける質問と、自由記述の質問とに分けて、それぞれ具体案を持ち寄って検討を加えた。調査の対象としたのは全国の高校生で、学年は主に2年生を中心に回答を依頼することにした。さらに学習者だけではなく、現場教師の声にもぜひ耳を傾けてみたいという思いから、学習者とともに国語科の教師にも別途質問事項を検討して、調査を実施することになった。調査はすべて学校に当方で印刷したアンケートの用紙を届けて、結果を返送してもらう形で実施した。

高校生を対象としたアンケートの調査項目として、合計24項目を考えた。その内訳は、性別・学年に関するもの1問、コミュニケーションに関するもの5問、作文に関するもの5問、漫画に関するもの7問、音楽に関するもの6問である。また教師を対象とした質問項目は合計12項目で、内訳としては、まず担当する国語科の授業に関わるものとして、性別と年齢に関するもの1問、国語科の授業に関するもの3問、漫画・歌詞の教材化に関するもの1問、学習者の実態を掌握する方法に関するもの1問を設置した。続いて学習者への質問事項と比較することを目的とした質問として、コミュニケーションに関するもの3問、漫画に関するもの2問、音楽に関するもの1問となった。

調査を実施した時期は、2003年12月から2004年の3月にかけての期間で、あらかじめ調査に協力可能な学校を確定してから用紙を配布することにした。結果として関東地方および近畿地方を中心とする一都一府五県からの回答が寄せられた。ちなみに、回答が届いた学校の種別と回答数は、以下のようになっている。

全日制普通科	1761	全日制工業科	126	全日制農業科	77
全日制国際教養科	31	定時制工業科	14	合計	2011

さらに、回答者の男女別の内訳は次の通りであった。

男子	806	女子	1201	無回答	4	合計	2011
----	-----	----	------	-----	---	----	------

これを学年別にすると、次のようになる。

1年生	485	2年生	1258	3年生	267	無回答	1
-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	---

調査の際に2年生を中心に依頼したことから、2年生の回答数が多くなったものである。

② 学習者を対象とした調査の結果

今回の調査結果に関しては、すでに『高校生のコミュニケーション及びサブカルチャーに

関する意識調査報告』(早稲田大学大学院教育学研究科町田守弘研究室、2004. 8、以下「調査報告1」と称する)にまとめて公にしているものだが、本項では改めてその要点を整理しつつ、調査結果から明らかになった現状を確認しておきたい。「調査報告1」では、高校生に対する調査結果と現場教師に対する調査結果とに分けて報告したが、まず高校生を対象とした意識調査の結果から確認することにする。

調査項目は、大きく次の5つに分けることができる。

- ① コミュニケーションの手段 ② メディア
- ③ 作文 ④ 漫画 ⑤ 音楽

①から③は、高校生のことばによるコミュニケーションの現実を探ることに主眼を置く。④と⑤は高校生が身近な場所で接するサブカルチャーの中から、代表的な漫画と音楽を選んで、それぞれどのように接しているのかを探ることを目標とした。以下に、それぞれの項目における具体的な質問事項と、それに寄せられた回答を紹介する。

②-1 コミュニケーションの手段

最初の質問事項は、コミュニケーションの際にどのような方法を取るかということである。この項目は、大きく二つに分けて質問することになった。それは、日常的なコミュニケーションの場合と、内面に踏み込んだ深刻な話題に関わるコミュニケーションの場合とに分けて、それぞれどのような方法で意思の疎通を図るかということ調べてみた。あわせて、パソコンや携帯電話などが急速に普及した現在、それらのメディアが高校生の間にどのように普及しているのかという点も調べることにした。

日常的なコミュニケーションの例として、具体的な質問事項には「友人に休日の都合を聞く」という場合を設定した。選択肢は「その他」を含めて8つ掲げた。寄せられた回答を整理すると、最も多かったのは男女とも「携帯電話でのメール」で、全体の80.8%に及んだ。続いて「会って話す」が60.2%と多く、高校生の日常的なコミュニケーションには携帯電話が大きな比重を占めることが明らかになる。特に携帯電話のメール機能に依存する傾向が見られることに注目しておきたい⁶。また「その他」の回答として、「聞かない」「学校外では会わない」のような内容のものがあった。そこには、友人との人間関係が希薄になり、自分自身の世界に入り込む高校生の姿を見ることができよう。

続いて日常的な会話に対して、話しにくいようなこと、心の内面に踏み込んだ内容について尋ねてみた。選択肢は前の設問と同じものである。すると今度は、「会って話す」という回答が64.1%と最も多く、「携帯電話でのメール」が61.0%と続く。さらに注目したのは、「手紙を書く」が17.0%に増えて、「固定電話で話す」「携帯電話で話す」とほぼ同数になっている点である。この傾向は特に女子において顕著に表れている。高校生は、事務的かつ日常的なことを伝える手段と、内面に关わる重要な事柄を伝える手段とを意識的に使い分けている。深刻な内容については、携帯メールに依存せず、肉声や直筆の表現に重点が置かれることが分かる。なお、その他の項目には、「話さない」「言わない」という回答が目立ったことから、意識的に他者とのコミュニケーションを深める努力をしない高校生の実像が明らかになる。

②-2 メディアとの関わり

高校生の周囲には多様なメディアが存在し、常に多様な情報を発信し続けている。そこで本調査では、高校生とメディアとの関わりについての調査を試みた。質問事項としては、新しい情報を取り入れるために最も多く用いる手段について、そして情報を取り入れる際に最も信頼できると思うメディアについて、選択肢を掲げて問うことになった。

その結果、新しい情報を取り入れるための手段として最も多かったのは「テレビ」と「インターネット」であり、両者の合計は71.8%に及んだ。反対に、書籍や新聞、雑誌などの活字媒体からの情報収集は合計20.2%にとどまっている。しかしながら、信頼できるかどうかという観点を掲げると、結果はまた異なった様相を呈することになった。すなわち、よく用いる手段として「インターネット」を選んだ学習者643人のうち、それが信頼できると回答したものは181人、全体の28.1%にすぎなかった。その分、269人、41.8%の学習者は新聞や書籍を選んでいる。高校生はインターネットをよく利用するものの、その内容に信頼してはいないという現状が浮かび上がる。その一方で、「どれもあまり信頼していない」と答える学習者、また「一応全部疑ってみる」や「いろんな媒体を複合的に取り入れて判断」と答える学習者がいたことは、注目に値する。さらに「自分の勘」や「自分の目」で物事を考えようとする学習者もあった。この調査結果は、メディア・リテラシー教育の問題にも関連する。

続く質問は、ことばとメディアとの関連を明らかにするためのもので、高校生がどのような場所でことばと出会うのかということ、メディアの影響や人との関係の仕方の変化とからめて調べるものである。質問としては、高校に入学してから聞いたり読んだりしたことばの中で最も印象に残っていることばは何か、それはどんな場所で出会ったことばかということ質問してみた。その結果、印象に残ることばは、身近な人よりも、「本・雑誌」(15.6%)、「テレビ・映画」(12.6%)、「歌詞」(13.3%)、「漫画」(7.5%)などから得たことばの方が多かった。

第1次調査では、印象に残ったことばを具体的に挙げてもらった。「調査報告1」には、そのすべてのことばを収録したが、全体的な傾向としては、励ましのことば、勇気を与えてくれることば、前向きな姿勢を促すことばが目立つ。この傾向は、後のサブカルチャーに関する調査内容にも関わるものであった。

②-3 作文

次に、第一のコミュニケーションに密接に関わる項目ではあるが、高校生にとって文章を書くということはどのような意味を持つのかという、文章表現に関する意識を調査することにした。ここでは、単に文章を書くということだけではなく、メールを書くことも含めて調査することにした。

まず、文章を書くことの好き・嫌いについて尋ねてみたが、その結果は、「好き」が31.1%、「嫌い」が28.8%、「どちらでもない」が40.1%となった。「好き」と回答した学習者が約3割で、「嫌い」を若干上回った点には注目しておきたい。ただし「どちらでもない」という回答が最も多く、日ごろから文章を書くという行為をあまり意識していない。作文指導においては、この「好き」という意識を伸ばす方向を模索する必要がある。

次にどのような種類の文章を書くことが特に好きか、反対に特に苦手か、ということ、選択肢を設けて尋ねてみた。好きな種類の文章としては、「友人に送るメール」「手紙」を

選んだ回答が多い。「その他」の回答として記述方式を取り入れたが、「日記」「フリーライティング」「歌詞を写す」などが示された。直接相手の人と関係するような種類の文章が、好まれる傾向にある。一方嫌いな文章としては、「小論文」「読書感想文」を掲げる回答が多い。言うまでもなくこれらは、学校で課題として出題されるものである。

さらに「文章を書くときに苦勞すること」を尋ねたわけだが、最も多かったのは「書くことが思いつかない」で、次が「与えられたテーマに興味がない」という回答である。作文の授業において、書くことがないという問題とともに、学習者の興味・関心と教室で与えられる課題とが不一致という問題にも対応が求められる。学習者の表現意欲を喚起するような課題を工夫しなければならない。

「書き方がわからない」「長く書けない」「どう書き出したらいいのかわからない」「いたいことをうまくことばにできない」という回答も多く寄せられた。この結果から、表現のための効果的な言語技術教育を検討する必要がある。作文指導の基盤には、常に「何を」「どのように」書くのかという点に関する指導が存在する。今回の調査結果からも、その点を確認することができた。

高校生がメールをよく用いているという事実はすでに②-1でも紹介したが、ここで改めてメールに関わる質問事項を用意した。「携帯電話でメールをすることが好きですか」という質問では、「はい」という回答が全体の46.2%に及び、「いいえ」の6.2%を大きく上回った。1日に送信するメールの数は、多い学習者では50通を超える場合もあった。なお、パソコンのメールに関しても同様の質問をしたが、こちらは「はい」が11.5%、「いいえ」が15.2%となり、高校生のメールはほとんどが携帯電話を通して送受信されていることが明らかになった。さらに、メールにおける絵文字・顔文字の使用に関しては、「よく使う」が58.1%、「たまに使う」が30.6%と、多くの学習者が絵文字・顔文字を好んで用いているという実態が分かる。高校生にとってメールとは、単なる情報伝達の手段ではなく、相手とコミュニケーションを取るための貴重な手段となっていると思われる。

②-4 漫画

第1次調査では、高校生が日ごろから接する機会が多い漫画と音楽を取り上げて、その実態を探ることにした。まず漫画に関する調査結果を紹介する。

最初の質問は、高校生が漫画に接する頻度に関するものである。選択肢の中では「たまに読む」が最も多く、全体の42.8%を占めている。「全く読まない」という回答が4.7%という結果からは、一週間単位では95%以上もの学習者が何らかの形で漫画を読んでいることになる。回答を男女別に整理してみると、男子の数値が女子を上回っていることから、男子学習者の方が漫画に接する機会が多いという事実が浮上する。

漫画との比較ということから漫画を除く読書の傾向の調査も試みたが、一ヶ月に読んだ本の本数は、上限を50冊とした場合、2.3冊となった。ただし、全体の41.6%の学習者が全く読んでいないという結果も出た。まったく読んでいないという学習者の数は男子が49.7%、女子が36.2%である。男子学習者の方が活字離れの傾向が進んでいることになる。

漫画の定期購読の状況を調査すると、「現在定期的に読んでいる」「過去に定期的に読ん

ていた」を合わせて男子81.6%、女子が80.2%と、男女とも8割を超えている。さらに、男子学習者は「現在定期的に読んでいる」という回答が50.6%で女子の29.0%を大きく上回っている。

では、高校生は漫画のどのような要素に魅力を感じているのだろうか。「漫画が好きな一番の理由」について尋ねたところ、男女ともに「ストーリーが面白いから」「ストーリーに感動したから」と回答した学習者が多かった。彼らは、ストーリーの面白さを漫画の魅力としてとらえていることが分かる。男女の相違としては、男子が「面白い」「笑える」など単純に娯楽としての要素を求める傾向が強いのにに対して、女子は「感動」「共感」など感情移入ができるところに漫画の魅力を指摘している。「その他」には「この漫画がなかったら今の自分はいないと思うから」「人生の大きな指針を与えられた」など、漫画は高校生の生き方に直接影響を及ぼしていることが分かる回答が目立った。

第1次調査では、好きな漫画の作品名、作家名、ジャンルを尋ねている。作品名のベストスリーは、第1位「NANA」(矢沢あい)、第2位「SLAM DUNK」(井上雄彦)、第3位「ONE PIECE」(尾田栄一郎)という結果であるが、「NANA」は特に女子からの支持が圧倒的に多く、第2位と3位の作品は男女に共通して支持されていることが特徴である。そして作家のベストスリーは、第1位が矢沢あい、第2位が井上雄彦、第3位が鳥山明という結果であった。矢沢あいはほとんどが女子からの支持であるが、井上雄彦は男女それぞれから支持されていることも、作品の順位に対応した傾向である。好きな漫画家として多くの学習者が挙げた中には、第3位の鳥山明を初め手塚治虫やあだち充など、現在の大学生やそれ以上の年齢の世代から支持されてきた作家ということになる。世代を超えて支持される漫画家がいるという事実にも、注目すべきであろう。さらに好きな漫画のジャンルでは、約60%の女子が「恋愛・ラブコメ」を選んでいる。これに対して男子は「スポーツ」「格闘・アクション」を選んだ。好きなジャンルでは、男女の差異が明確に現れたと見ることができる。

最後に、漫画を国語科の教材として扱うことについての意見を尋ねたところ、「扱ってほしい」が42.2%、「扱ってほしくない」は20.8%、「どちらでもない」が37.7%であった。「扱ってほしい」という学習者が「扱ってほしくない」の約2倍いたわけだが、「扱ってほしくない」の20.8%には、「漫画嫌い」の学習者だけではなく、彼らの日常に入り込んでいるだけに逆に学校で扱うこと自体に抵抗を示すということが考えられる。

②-5 音楽

第1次調査では、漫画に続いて音楽に対する高校生の関心を調べることにした。国語科との関係からすれば、2002年度から使用された中学校の国語科教科書に中島みゆきと松任谷由実の歌詞が収録されたことから、歌詞を教材化することの可能性を探るという意味もある。高校生の身近な場所にあると思われる音楽と、彼らがとどのように関わっているのかを調査することになった。

音楽に関する質問事項は、「一日にどのくらい音楽を聴きますか」である。これに対する回答は「1時間未満」が31.8%と最も多く、次が「1時間以上2時間未満」である。

「全く聴かない」という学習者は5.1%という結果から、多くの高校生が音楽と関わっていることが明らかになる。

そこで今度は音楽との関わりをさらに追求するために、「音楽を聴くときに最も心が惹かれるのは何に対してですか」という質問を投じてみた。その結果は、「メロディ」が43.9%、「歌詞」が33.0%であり、「リズム」10.6%、「アーティスト」6.6%と続く。特に「メロディ」と「歌詞」が、音楽を聴く際には重要な要素となっている。

続いて、国語科に関わる歌詞に特化した質問をした。「歌詞によって好きになった曲があればその曲名・アーティスト名とその理由や好きなフレーズなどをお書きください」という質問項目にしたが、歌詞によって好きになった曲とアーティストのベストスリーは次の通りである。まず歌詞によって好きになった曲（カッコ内はアーティスト）の第1位は「世界に一つだけの花」（SMAP）、第2位は「あなた」（HY）、第3位は「終わりなき旅」（Mr. children）という結果である。また歌詞によって好きになった曲のアーティストのベストスリーとしては、第1位がMr. children、第2位はBUMP OF CHICKEN、そして第3位SMAPであった。

曲とアーティストの双方の上位に入った「世界に一つだけの花」（SMAP）と「終わりなき旅」（Mr. children）について、高校生から「元気になれる」「自分に自信が持てた」「元気や勇気を与えてくれる」「共感できる」「励まされて希望が出てくる」などのコメントが寄せられた。総合的に見て、歌詞によって好きになった曲は「共感」というキーワードで括れることが明らかになった。励ましてくれる曲、共感できる曲に対する支持が多い。

最後に、漫画と同様に「歌詞を国語の教材として扱うことについて、どう思われますか」という質問事項を掲げたわけだが、「扱ってほしい」が46.3%、「扱ってほしくない」が14.7%、「どちらでもない」は39.0%であった。三つの選択肢がほぼ漫画に準じた比率で選ばれたことは興味深い。歌詞に対する嗜好はあくまでも個人的なものであって、授業という公的な場所で扱うということに対する疑問や反感を持つ学習者もいる。サブカルチャー教材化の可能性を探る際に、配慮しなければならない問題である。

③ 現場教師対象の調査結果について

第1次調査では、学習者とともに担当する教師の意識をも確認するという意図から、学習者とは別に国語科の教師へのアンケート調査も実施することにした。まず教師の視点から学習者の現実をどのように把握しているのかを尋ね、さらに学習者と同じ問いを掲げることによって、教師と学習者との世代間のずれの実態を明らかにするというねらいもあった。回答を寄せてくれたのは、男性教師27名、女性教師21名の合計48名である。回答者の年齢は、20代が3名、30代4名、40代28名、50代以上が13名という内訳だった。

教師に対する質問項目には、学習者のどのような点が最も問題であると感じているかという内容がある。この問いに対しては、最も多かったのは「学習意欲の低さ」で、次いで「基礎学力の不足」が挙げられた。その他の項目として挙げられたのは、「集中力・根気の欠如」や「好奇心・関心の低さ」「まじめさの欠如」であった。

教師に対する質問事項として、今回特に重視したのは、漫画と歌詞の教材化の実態である。それぞれ、次の三つの選択肢を用意した。

- ① (副教材も含めて) 既に教材として扱ったことがある
- ② (副教材も含めて) 教材として扱ってみたい
- ③ 教材として扱う必要はない

結果は、漫画の場合、①52.1%、②18.8%、③29.2%であった。実際に授業で漫画を扱ったという教師が半数以上、これから扱ってみたいという教師も2割近くということから、教室で漫画を扱うことに対しては教師の側からもそれなりの支持を得ていると見ることができる。調査では続けて「扱ったことがある」と回答した教師に、具体的な作品名、扱った理由、学習者の反応を尋ねることにした。その結果、『源氏物語』の学習に『あさきゆめみし』を用いるという例に代表されるように、すべてが副教材としての扱いであった。漫画を主教材として、漫画を読むという活動を中心とした授業の実践は挙げられることがなかったという実情である。さらに学習者の反応に関しては、「概ね良好」としながらも、「その場は盛り上がるが…」のように、ことばの学びにつながるという点では疑問を持つ回答があった。

漫画を扱ったことがある、もしくはこれから扱ってみたいという教師に、今後扱ってみたい作品名・作家名とその理由を挙げてもらったところ、寄せられた回答の多くは古典関係の作品であった。特に古典学習への導入として、また内容理解の補助資料として漫画が有効と考える回答が多かった。国語科の教材としての漫画を考える際の一つの方向を、これらの回答の中に見ることができる。

続けて歌詞について、同様の調査を実施したところ、先に掲げた①～③の選択肢の回答は次のような結果であった。すなわち、①が54.8%、②が26.2%、③が19.0%である。歌詞も教材として扱ったことがある教師が半数以上という、ほぼ漫画に準じた結果となったことは興味深い事実である。具体的な曲名・歌手名、理由、学習者の反応も掲げてもらったわけだが、教師の世代を反映してか、中島みゆき、井上陽水、さだまさし、尾崎豊などが挙げられた。唱歌・童謡を挙げた回答もあった。授業の目標としては、文語文法を含めて古典のことばに親しむこと、また詩歌の単元の一環として作品のリズムを実感させることなどが多かった。学習者の反応は、漫画と同様に「良好」としながらも、「その場の盛り上がり」「意欲的に取り組んではいたが、言語に対する興味は深められたか疑問」とする声があった。

今後扱ってみたい曲とその理由に関しては、唱歌・童謡系列の曲と中島みゆき、井上陽水、尾崎豊、ビートルズなどの曲とが挙げられた。前者の理由は、文語に触れる機会になること、そして季節感やことばの決まりについての学習に役立つことである。これに対して中島みゆきを挙げた回答では、詩への導入として扱えるからという理由が目立った。

教師を対象とした調査では、続いて学習者と同様にコミュニケーションの手段、漫画や音楽との関わりに関して尋ねてみた。学習者との比較のうえで、最も相違が際立った項目は、漫画に関する項目である。特に漫画を読む頻度に関しては、「全く読まない」という回答が46%にも及んでいる。好きな曲とアーティストに関しても、当然のことながら、学習者とは異なる傾向になる。教師と学習者との差異は、世代の相違から派生する自然な現象と見ることができよう。しかしながら、世代が異なるからということで、学習者の現実を理解しようとする努力を怠ることはできない。そこで、教師がどのような方法によって学習者の実態を理解するのかという問題について、記述式の回答を寄せてもらった。

そこで挙げられたことは、学習者と直接話をする、文章化させる、アンケート調査をするという3点に集約できる。常に学習者を見詰め、対話を試みつつ、彼らの現実を把握しようとする努力を惜しむべきではない。そこで、学習者が好んで読んだり聴いたりする漫画や音楽に、教師も関心を寄せる必要がある。彼らの視点に立ったとき、教材開発や授業構想に関する新たな発見を期待することができる。

教師を対象としたアンケート調査の最後に、「その他、国語教育全般についてご意見があればご自由にお書きください」として、自由記述による回答を求めたが、多くの教師が具体的なコメントを寄せてくれた。個々のコメントの具体的な中身については「調査報告1」にすべて紹介したので、以下に主な見解のみ整理して紹介する。

- ① 学習者のことばが豊かではないために、基本的なことばが通じない。正しい日本語を教育する必要がある。
- ② 映像文化が盛んで活字文化が悲慘な状況になっているいま、国語教育は活字文化教育の最後の砦となっている。
- ③ 漫画や歌詞に関して、インパクトはあるものの、あくまでも理解の手助けやきっかけにしかならない。
- ④ 教室で育成したい国語力と、大学入試で問われる国語力との間には、大きな隔たりがある。高校の国語科に何が求められているのかを、広く問うてみたい。

教師を対象とした今回のアンケート調査において、寄せられた回答数は決して多くはないが、国語教師の本音と思われる貴重な回答が多く寄せられたことは大きな成果であった。これからの国語教育の可能性を探る際に、以上のような教師からの回答は、多くの示唆を与えてくれる。

④ 国語科教科書教材の傾向と教材開発の可能性

第1次今回調査の目的の一つは、高校生のコミュニケーションの実態と、漫画と音楽に対する意識の全体的な傾向を明らかにすることにあつた。具体的な調査結果に関しては前の章で要点を紹介したが、この結果を受けて、学習者の実態に即した国語科の教材開発を試みることが調査のもう一つの眼目である。

日々の生活の中で学習者が親しんでいるサブカルチャーの中から、今回は漫画と音楽を選んで、それぞれの素材と学習者との関わりについて考察を進めてきた。本節では国語科教科書に収録された教材に目を向けて、漫画や音楽がどのように扱われているのかという点について概観することにしたい。ただし、調査を実施した2003年度は、1999年に告示された高等学校学習指導要領が学年進行で実施された年度であり、教科書が新しい学習指導要領に対応したものに切り替わる時期でもあつた。そこで2002年度から全面実施された中学校学習指導要領に基づく中学校の国語科教科書にも目を向けて、教材の動向を概観することにした。

2002年度から中学校の現場で使用されている国語科教科書について、まず漫画がどのような形で扱われているかを整理すると、次のような状況になっている。

④-1 教材の文章の理解を補助するために漫画を使用する

教育出版の2年生用の教科書では、香山リカの『わたし』のことを知っていますか」と題する文章に関連して、手塚治虫の「グランドール」という漫画が紹介された。また三省堂の1年生用の教科書には、手塚治虫の「この小さな地球の上で」と題する文章に添えて、手塚の「三つ目がとおる」「火の鳥」「ジャングル大帝」が紹介されている。S社ではこの教材を長く採録しているが、図版として挿入される漫画の扱いには改訂ごとに変化が見られる。すなわち文章と漫画との関係がより濃密になり、最新の2002年から使用されている教科書では、教材の文章の論旨を漫画によって確認するという方向になっている。さらに中学校の教科書を発行する現行5社中4社までが、古典（漢文）の故事成語「矛盾」に関連した3コマもしくは4コマの漫画を掲載している。これらの漫画は、教材本文の理解の補助教材として用いられている。

④-2 表現技巧の理解を深め、表現への関心を喚起するために漫画を使用する

学校図書の3年生用の教科書には「情報と表現」のコーナーに、「漫画が開く言葉の世界・オノマトペ」として園山俊二の「ギャートルズ」が掲載されている。これは夏目房之介の『マンガはなぜ面白いのか』という論説を受けて、漫画を通してオノマトペという表現技巧を学ぶことが目指されたものである。教科書の学習の手引きには、「漫画の中から音や様子に合った形が工夫されているオノマトペを探して集め、紹介し合おう」という学習活動が設定されていることから、その趣旨は明確である。ここで注目すべきは、実際に漫画を読むという活動が想定されているという点であろう。教科書の学習課題から、学習者は漫画を読んでオノマトペを探すことになる。ただし漫画を読むといっても、あくまでも表現に限定された学習ではある。

④-3 表現のための教材として漫画を使用する

三省堂の2年生用の教科書における「表現プラザ」というコーナーには、植田まさしの「コボちゃん」と、にしみやおさむの「トマトさん」が登場する。それぞれ四コマ漫画ではあるが、学習の手引きとして「コボちゃん」の場合には「四コマ目のせりふのおもしろさを説明してみよう」、「トマトさん」の場合は「四コマ目のせりふを考えて書いてみよう。また、その理由を説明してみよう」という学習活動が示されている。このコーナーでは、教科書に採録された四コマ漫画を直接使った表現の学習が展開されることになる。この分類項目の漫画の扱いは、漫画を副教材ではなく主（本）教材として取り扱っている点に特色がある。すなわち、教科書に採録された漫画を直接用いた学習活動が展開されるということが、最大の特徴である。今後の教材開発は、主にこの方向における漫画の可能性を検討する必要がある。

2003年度から高等学校で使用されている教科書においても、中学校教科書における以上のような分類を当てはめることができる。例えば選択必修科目「国語総合」では、第一の分類に属するものとしては旺文社の教科書で、手塚治虫の「ぼくのマンガ人生」という文章が教材となり、手塚の「ブラック・ジャック」が紹介されている。この教材の学習の手引きに「筆者がマンガ作品を通じて取り上げようとしているテーマはどのようなことなのか、考えてみよう」とあるように、漫画は教材本文の理解を助けるという役割を担っている。

第二の分類に属するものとしては、大修館書店の「国語総合」の教科書に夏目房之介の「マンガー線から絵が生まれるとき」（『マンガはなぜ面白いのか』による）という文章を採録していることを挙げることができる。この教材の「学習の手引き」には「自分の好きな漫画家の、絵の描き方の特色を考えて、代表的な絵を示しながら、発表し合ってみよう」という課題があることから、中学校の学校図書とほぼ同じ方向を目指したものと見ることができよう。

第三の分類に相当する例は、高等学校の教科書ではあまり見ることができない。すなわち漫画を本格的な教材として、それを直接用いた学習活動を設定するというところに慎重になっているという姿勢が伺える。今後教材開発を進める際に、大いに改善すべき点であろう。

次に歌詞に関しては、2002年度から中学校で使用されている教科書に、本格的な教材として登場している。具体的には、光村図書2年生用の教科書の第一単元「春を伝える」に、松任谷由実の「春よ、来い」が収録された。同じ単元には、谷川俊太郎の「春に」が収録されているが、単元の学習の手引きとして、次の2点が掲げられた。

- ① 感じたことを話し合おう。
- ② 作品の特徴が表れるように、声に出して読もう。

特に第二の音読・朗読に関わる手引きには、歌詞の教材化の意図を見ることができる。

続いて東京書籍3年生用の教科書の第一単元「言語感覚を磨こう」には、中島みゆきの「永久欠番」が収録された。ちなみにこの教材に関わる学習の手引きの課題は、「詩の意味を考えながら朗読しましょう。」という内容である。この手引きからも、音読・朗読のための教材という位置付けを見ることができる。すなわち、作品の解釈や鑑賞に関する具体的な手引きではなく、声に出して読むという「歌」に直結する要素を意図した教材と見ることができよう。

なお歌詞に関しては、かつてジョン・レノンの「イマジン」を採録した教科書が編集されたが、いまはその会社が教科書発行から撤退するなどの事情もあって、高等学校の教科書ではほとんど取り上げられていないというのが実情である。単に音読・朗読のための教材としての歌詞の位置付けは、高校生に馴染むものではない。

今回の大学院研究室による第1次調査結果から、高校生がメロディに続いて歌詞に着目し、歌詞によって好きになった曲もあるという現状の中で、国語科の教材としての歌詞の可能性をさらに追求してみたいと思う。

3 第2次調査＝「国語科教科書教材の受容に関する実態調査—新教材の開発に向けて」について

① 調査の概要

前節で紹介した第1次調査に続いて、2005年度修士課程1年在籍の院生を中心とした調査チームを編成⁷して、第2次調査として「国語科教科書教材の受容に関する実態調査—新教材の開発に向けて」と題する調査を実施することになった。この調査の第一の目的は、中学生および高校生の言語生活の実態と、国語科に対する意識を明らかにするとい

う点である。

さらに調査の目的の第二として、国語科の授業で使用されている教科書の教材に対する学習者の意識を明らかにするという点を掲げるようになった。学習者が国語科の教材をどのように受け止めているのかを知ることによって、教材開発に対する具体的な指針を得ることができると考えたからである。

アンケート調査は、中学校と高等学校を対象としたものをそれぞれ作成し、結果を比較することもできるように配慮した。さらに第1次調査と同様に、学習者だけではなく、指導に当たる教師への調査も同時に実施することによって、学ぶ側と教える側それぞれの意識を明らかにすることを目指した。

質問項目は、中学生に対するアンケートでは「国語」という括りにしたが、高校生を対象としたものでは「現代文」と「古典」とに分けて、それぞれ現行の教科書教材に準拠した質問項目を設置した。

調査は、まずアンケートの質問項目を吟味するところから出発した。後の集計のことにも配慮して、選択肢を設ける質問と、自由記述の質問とに分けて検討を加えた。調査の対象としたのは全国の中学生および高校生で、学年は2年生の学習者に回答を依頼することにした。さらに学習者とともに、担当する国語科の教師にも別途質問項目を立てて、調査を依頼することになった。この結果、用意したアンケートは中学生と高校生、そしてそれぞれの担当教師を対象にしたものの合計4種類になった。調査はすべて学校に当方で印刷したアンケート用紙を届けて、結果を返送してもらう形で実施した。

アンケートの調査項目としては、性別に関するもの、日常生活に関するもの、国語科の学習に関するもの、教科書教材に関するものをそれぞれ設置した。中学生には合計17項目、高校生には合計24項目の設問を用意した。

また教師を対象とした質問項目としては、性別と在職年数に関するもの、学習者の現状に関するもの、教師自身の日常生活に関するもの、国語科の授業に関するもの、教科書教材に関するものを設置することにした。中学校担当の教師には合計17項目、高等学校担当の教師には23項目を用意することになった。

調査を実施した時期は、2005年10月から12月にかけての期間で、あらかじめ調査に協力可能な学校を確定してからアンケート用紙を届けることにした。結果として関東地方を中心とする中学校・高等学校から回答が寄せられた。ちなみに、回答が届いた学校と人数は次のようになっている。まず学習者の状況である。

中学校	17校	1394人
高等学校	30校	3407人

続いて、担当教師の状況である・

中学校	16校	33人
高等学校	29校	88人

なお男女比は学習者・教師ともおよそ半々で、教師の在職年数は平均すると中学校16.5年、高等学校17.7年である。

② 調査結果から

今回の調査結果に関しては、『国語科教科書教材の受容に関する実態調査—新教材の開発に向けて—調査報告書』（早稲田大学大学院教育学研究科町田守弘研究室、2007.2、以下「調査報告2」と称する）にまとめて公表しているものだが、ここでは改めてその要点を整理しつつ、調査結果から明らかになった要点を略述しておきたい。

まず学習者を対象とした意識調査の結果から、その要点を紹介する。最初の質問事項は学習者の日常生活に関するもので、携帯電話とインターネット使用の実態を問うものである。まず携帯電話の所持率に関しては、中学生は70%、高校生は95%と、ほとんどの学習者が所持しているという実態が明らかになった。アンケートが学校で実施されたという状況を勘案すると、実態として所持率はこの数値よりさらに多いものと思われる。そして、平均してどの程度メールをするかという問いにたいしては、中学生は1日に30から50回程度、高校生は1日に10回程度という回答が最も多い。日常生活の中で、彼らは頻繁にメール交換をしていることが分かる。続いてインターネットの使用に関しては、中学・高校生とも2、3日に1回程度という回答が最も多かった。特にSNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）の普及によって、インターネットの利用は今後ますます増加するものと思われる。

「今までで一番感動したこと」に関する質問では、最も多かった回答が「テレビや映画を観たとき」であったことから、メディアが学習者に与える影響の大きさが分かる。その一方で、「感動したこと」や「楽しかったこと」の上位に「部活動」や「友達と遊んだこと」「旅行に行ったこと」が挙げられている。メディアの影響とともに、やはり現実に体験したことの重さは学習者の中で確かな位置を占めている。

学習者が「もっともよく見るテレビ番組」の上位3位までの項目は、中学・高校生ともに「バラエティ」「ドラマ」「歌番組」となっている。彼らは面白さにこだわり、物語性を追求する。そしてサブカルチャーを好む傾向にあることが指摘できる。そして彼らが日常生活の中で熱中していることとして、中学生は「音楽」「部活」「ゲーム」、高校生は「音楽」「ファッション」「部活」が挙げられた。「ゲーム」が好きというのは中学生に顕著に見られた傾向であり、先に言及したメディアの影響にも関連する。中学・高校生に共通した要素として「音楽」と「部活」が挙げられたことにも注目しておきたい。

続いて国語の授業に対する学習者の好き嫌いに関しては、「普通」が最も多く約50%、そして「大好き」「好き」と「嫌い」「大嫌い」が同程度となっている。ただし中学生では、「大嫌い」が「大好き」の2倍程度となっている。好きな理由としては「本を読むのが好きだから」「役に立つ考え方を学ぶことができるから」「いろいろなことを考えるきっかけとなるから」が多く、嫌いな理由としては「文法（古典）が難しいから」「勉強の仕方がわからないから」「学習意欲が湧かないから」という回答が上位を占めた。

国語の授業内容にさらに立ち入った質問項目では、国語の授業で身に着けたい学力としては「話す力」が、不足している学力としては「表現力」が挙げられていた。これは中学・高校に共通する傾向である。国語科の実用的な側面に関心が寄せられていることが分かる。さらに、学習者が欲する国語科の授業形態は、「教科書や黒板を使って先生が教えてくれる授業」、そして「ビデオやOHP、パソコンなどの視聴覚機器を利用した授業」ということになる。自ら主体的に学習するというよりは、与えられるものを受け取るという学習者の受動的な姿勢を垣間見ることができよう。

そして調査の中心でもある教科書教材の話題に関する質問では、まず中学・高校ともに好きな教材のジャンルとして、物語・小説教材が多く挙げられた。一番心に残った具体的な教材名としては、中学生は「大人になれなかった弟たちに」と「竹取物語」、高校生は「羅生門」と「海の方の子」が上位を占めた。その理由としては、中学・高校ともに「内容がおもしろいから」が最も多く、中学生は「心が動かされたから」、高校生は「考えさせられる内容だったから」が続く。

それでは、学習者は今後どのような教材を望んでいるのだろうか。今回のアンケートでは、「これから国語科で扱ってほしい作品やジャンル」を自由記述によって尋ねてみたが、挙げられた作者・作品・ジャンルの傾向としては物語・小説がきわめて多く、中でも特に最近話題になった作品が目立っている。先に言及した好きなジャンルと関連するが、学習者は物語・小説を好むという傾向があることが分かる。しかも特に新しい作品が好まれているという事実が明らかになった。

4 第3次調査＝「中学生・高校生の言語活動と言語生活に関する意識調査」について

① 調査の概要

第3次調査に関しては、2006年度修士課程在籍の大学院生によって調査チームを編成⁸し、「中学生・高校生の言語活動と言語生活に関する意識調査」というテーマで調査を実施することになった。質問項目は中学・高等学校共通として、合計13項目を用意した。その内訳は、日常生活における会話に関するもの、日常生活に関するもの、読書に関するもの、国語科の学習および授業に関するもの、教科書教材に関するもの、感動体験に関するものをそれぞれ設置した。

調査は、2006年の11月から12月にかけての期間に実施した。調査の方法は第2次調査に準拠したものになっている。回答が届いた学校と回答者数は以下の通りである。なお回答が届いた学校の地域は1都4県（東京都、千葉県、神奈川県、山形県、静岡県）で、男女別にすると男子2387人、女子1458人からの回答を得た。

中学校	18校	1931人
高等学校	20校	1914人

② 調査結果から

今回の調査結果に関しては、『中学生・高校生の言語活動と言語生活に関する意識調査報告』（早稲田大学大学院教育学研究科町田守弘研究室、2007. 3、以下「調査報告3」と称する）にまとめて公表しているものだが、ここでは改めてその要点を整理しつつ、調査結果から明らかになった要点を略述しておきたい。

続いてこの調査の結果の概要を紹介する。調査では、調査のタイトル「中学生・高校生の言語活動と言語生活に関する意識調査」からも明らかなように、学習者の現実を的確に把握することに主眼が置かれている。まず初めに国語科の好き嫌いについて尋ねることになった。なおこの調査では、択一式回答の選択肢をすべて4段階として、意識の度合いを

尋ねることにした。例えば好き嫌いに関する設問では「とても好き・まあまあ好き・あまり好きではない・全く好きではない」の4つの段階に分けて、当てはまるものを一つ選ぶという方式にしたのである。これによって、集計の際に他の設問との比較がしやすくなった。

国語科の好き嫌いを訪ねた結果、全体を集計すると、「とても好き」が11.2%、「まあまあ好き」が48.6%、「あまり好きではない」が33.2%、「全く好きではない」が6.9%であった。なおこれらの結果は、男女別や校種別にした集計においてもほぼ変わらなかった。ただし「まったく好きではない」と回答した学習者は、女子よりも男子の方が多く、中学生よりも高校生の方が多いという結果であった。

好き嫌いの理由に関する設問は記述式にしたが、まず国語科が好きと回答した学習者は読書、特に小説が好きだからという理由を掲げている。国語の学習を通して新しい作品との出会いを求める声も多い。また漢字や語彙の習得にも意欲的である。さらに国語科に対する興味が試験の結果に直結することが、学習者の意欲を喚起しているという事実も明らかになった。

反対に国語科が嫌いと回答した学習者の多くは、文章を読むことに苦手意識を抱いている。自らを読解力に乏しいとしてとらえる声も目立つ。漢字や古典文法を覚えることが苦手とする者が多い。さらに、はっきりとした正解がないこと、学習の方法が分からないことなども、国語嫌いの主要な原因になっている。

調査では、さらに立ち入って、国語科の学習内容を細分化し、それぞれに対する好き嫌いの意識をも問うてみた。全体的な傾向として明らかになったことは、「小説を読む」ことに対する学習者の関心の高さである。すなわち、「とても好き」と「まあまあ好き」を合わせて80.8%にも及んでいる。同様にして「好き」と回答した学習者が多かったものは、「クラスメイトの意見を聞く」が62.8%、「随筆・エッセイを読む」が56.1%、「話し合いをする」が53.3%と続く。

反対に「あまり好きではない」と「全く好きではない」を合わせた回答が多かった項目は、「詩・短歌・俳句を創作する」が70.0%、「意見を発表する」が68.9%、「漢詩・漢文を読む」が68.6%、「文法の学習をする」が68.5%であった。

次に、国語科の授業を通して身に付けたいことを問うた設問では、「文章を読んで内容を理解する」ことが最も多くて91.0%にも及んだ。その他特に多かったのは、「高校や大学などの受験に合格する」が83.0%、「テストで点を取る」が80.4%である。学習者の多くは、読解力を身に付けたいと考えており、その力は校内テストや受験などの場で発揮されることが多いことから、学習者の関心が高いことが分かる。

調査では、学習者の「書くこと」および「読むこと」に対する意識を調査した。まず「書くこと」に対する意識調査の結果からは、学習者が日常生活の中ではほとんど書く活動を行っていないことが明らかになった。ただし、特に著しい特徴としては「携帯電話でメールする」学習者が76.7%と多いことである。さらに「手紙を書く」ことに対しては「全くしない」と回答した者が他の活動に比べて少ない。携帯メールや手紙のような、特定の相手に対する書く活動に、彼らの関心が集中していることに注目したい。

続けて「読むこと」に関する活動であるが、学習者が日ごろよく読んでいるものは「マンガ」であり、半数以上の学習者が日常的に接している。「マンガ」に続いてよく読んでい

るのは、「雑誌」「小説」「インターネットの文章」と続く。反対に彼らが日常生活の中で読まないものとしては、「古文・漢文」が94.2%もの学習者から「全く読まない」「あまり読まない」という回答が寄せられている。続いて「詩・短歌・俳句」を読まない者が90.1%ときわめて多いという結果であった。

最後に、この調査においても教材開発の問題に関わる設問を用意したので、その結果の概要について言及したい。学習者が国語科の授業で学習した教材の中で、好きになったり印象に残ったりした作品を記述式で挙げてもらったところ、最も多かったのは「走れメロス」であり、続いて「ちいちゃんのかげおくり」「ごんぎつね」「羅生門」「こころ」と続く。10人以上の学習者から上げられた作品の一覧を作成すると32位までの中に詩教材が1編、説明文教材が1編入っているほかは、すべてが小説教材であった。授業で学習した教材として学習者の意識に残るジャンルは、圧倒的に小説・物語教材であることが明らかになった。

国語科の授業で新たに教材として取り入れてほしいジャンルを尋ねると、ここでも「小説・随筆・エッセイ」を挙げる者が多く、「とても思う」と「まあまあ思う」を合わせて69.3%となっている。これに対して「説明文・評論文」は33.6%と少ないのが事実である。ちなみに「古文・漢文」「詩・短歌・俳句」も「説明文・評論文」とほぼ同じ傾向になった。

選択肢として掲げた様々なジャンルの中で、学習者から新教材としての支持を集めたものは「映画・ドラマ」の70.3%⁹、「テレビ番組」の65.5%、「歌詞」の59.6%、「マンガ」「雑誌」の各56.1%であった。反対に支持が少なかったものは、「古典芸能」の24.4%、「ラジオ番組」の30.4%、「詩・短歌・俳句」の31.5%であった。

5 総括と課題

まず第1次調査によって、高校生のコミュニケーションの実態と、漫画・音楽に関する意識を把握するために、全国の高等学校現場へのアンケート調査を実施した。その結果を整理した「調査報告1」に基づいて、前項では要点を絞って紹介してみた。あわせて、国語科の新たな教材開発に向けての可能性を探るという立場から、いくつかの提言を試みてきた。

高校生のコミュニケーション・ツールとして、携帯電話が普及しているわけだが、わたくしたちはその現状を排斥することはできない。たとえ校則によって、学校への持ち込みを禁止したとしても、学習者の携帯電話を通してのコミュニケーションの実態には、何の変化も期待できないことは容易に想像できる。また漫画や音楽を初め、サブカルチャーと称される様々な素材は、高校生の身近な場所にあるものだが、学校にはそれらを受け入れるだけの容量に乏しい。

冒頭で触れた佐藤学の言う『「学び」からの逃走』の実態は、ますます深刻になっていると思われる。学校に、そして授業の中に、もっと直接学習者の現実と関わる場所があってもよい。わたくしは、学習者の現実に即した教材開発を提案してきた。それはたとえばサブカルチャーに関わる素材の中から、教材として成立するぎりぎりの境界線上に位置付けられるものであった。今回実施した実態調査を通して、この「境界線上の教材」の可能性

をさらに追求する必要性を痛感した。

教材開発に臨む教師の側の意識として、教材や授業に対するパラダイム転換が必要である。携帯電話を例とするなら、高校生の携帯メールによる文章創造の力量を、作文指導の領域につなげることを工夫してみたい。府川源一郎は「ケータイ作文の可能性」について言及している¹⁰が、注目すべき見解である。この府川の問題提起を、教材開発にどのように生かすかが今後の課題となる。

「境界線上の教材」として、わたくしは主にサブカルチャーに属するいくつかの素材を開発し、教室での実践を通してその教材としての適否を検証してきた。第1次調査では、特に漫画と音楽を取り上げたわけだが、それぞれ高校生が強い関心を持つ素材であり、国語科教材としての可能性は確実に広がりつつある。歴史的な視点から教科書教材を把握しつつ、最新の教科書を調査してみると、特に中学校で漫画と歌詞が普及しつつあることがわかる。漫画はかねてから補助教材として、様々な形で取り扱われてきたが、今後はぜひ本教材としての扱いを検討したいと思う。「マルチリテラシー」が国語教育の分野でも話題になりつつある現在¹¹、漫画のリテラシーもその中の一分野として位置付けつつ、本格的な研究を進める必要がある。まず求められることは、適切な漫画作品の発掘ということになろう。教科書に収録される漫画は四コマ漫画が多いが、これはページ数の関係にもよる。今後は本格的なストーリー漫画の教材化も視野に入れて考えることが求められる。

歌詞はその折々の流行があることから、普遍性のある作品を発掘するのは困難なことである。教科書が歌詞の教材化に消極的なのは、教科書編集の時点と発行の時点とでは、様々な状況の変化が想像できるからでもある。ある程度の普遍性が担保できるような作品を教材としなければならない。

歌詞の中には、子どもたちの内面を反映したものもある。土井隆義の子ども論¹²の中に、浜崎あゆみ作詞の歌詞が引用されていた。土井はこの歌詞に言及し、浜崎あゆみの歌が「自分語りのようなもの」ゆえに「若者たちはそこに共感を覚える」として、次のように述べている。

ここに端的に示されているように、若者たちにとってなによりも重要なのは、自らが考える言葉の社会的説明力の強さではなく、自らが感じる内発的な衝動の切実さです。

歌詞を教材化する際に、単に音読・朗読の要素だけではなく、その歌詞のことばから受けるイメージやメッセージを把握するという活動を組み込むことができるのではないか。表現技巧の問題から内容の読み取りへと踏み込んだ教材化を検討する必要がある。

続く第2次調査および第3次調査の結果の詳細は、「調査報告書2」と「調査報告書3」において公表した。ここでは、二回の調査の結果を比較検討してみると、重なる箇所が明らかになる。そこにこそ、学習者の現実が立ち現れると言えよう。では特に重なった点はどのような側面であったのか。それを二つの観点からまとめてみると、以下のような特徴になる。

- ① サブカルチャーの系列に強い関心を持っていること。
- ② 小説・物語に強い関心を持っていること。

これら二点の特徴に関しては、国語科の教材開発を実現する際に常に目配りをしておきたい要素である。

第2次調査では、学習者とともに担当する教師の意識をも確認するという意図から、学

習者とは別に国語科の教師へのアンケート調査も実施することにした。まず教師の視点から学習者の現実をどのように把握しているのかを尋ねてみた。いま学習者に不足していると思われるものは、中学・高校の教師ともに「思考力(論理的思考力)」という回答である。反対に優れているものとしては「感性」や「情報収集能力」が挙げられていた。

教師はとかく学習者の抱える問題点にのみ配慮して、優れた側面を考慮しない傾向がある。さらに、彼らの興味・関心よりも、指導の必要性に立脚した教材開発を展開しがちである。しかしながら、冒頭で触れた佐藤学の言う『「学び」からの逃走』がますます深刻になっていると思われるいま、学校や授業の中にもっと直接学習者の現実と関わる場所があってもよい。改めて、強制的に「学び」へと連れ戻すのではなく、逃走した場所に新たな「学び」を立ち上げる努力を続けたい。そのためには、彼らが求めるものを的確に受け止めること、そして彼らの優れた側面をさらに伸ばす方向を取り入れることが必要である。

特に今後は、優れた感性と情報収集力をさらに育成することを目指した、物語・小説系列の教材を精力的に発掘したい。最新の作品にも目を向けなければならない。そして学習者が日常生活の中で頻繁に利用する携帯電話¹³やインターネットにも、教材開発のためのヒントがある。ただし注意したいのは、その教材を用いて国語の確かな学力育成につながる授業が構想できるという点である。いうまでもなくそれは、教材開発の大切な条件である。

これまでにわたくしは、学習者の現実に即した教材開発を提案してきた。それは例えばサブカルチャーに関わる素材の中から、教材として成立するぎりぎりの境界線上に位置付けられるものであった。三回の実態調査を通して、この「境界線上の教材」の可能性をさらに追求する必要性を痛感した。

常に魅力溢れる国語科の教材開発を目指したい。学習者の現実に切り結んだ教材を開発すること、それとともにその教材を用いた効果的な授業を構想することこそが、教師の最も基本的かつ重要な仕事だと考えている。明日の授業をもっと工夫してみよう、という思いが戦略的教材開発の出発点であった。「工夫」の域を逸脱してより大胆な試みをも含めた教材開発を実現したい。

教材の基本的な条件として、「楽しい」という要素がある。学びを支えるのは、「楽しい」という思いである。それは様々な学びを開くための大きな原動力となる。どのようにして「楽しい」と思えるような要素を授業に取り入れるのかを、まず検討する必要がある。「戦略」の第一のポイントは、この「楽しさ」の演出ということになるだろう。

教材の基本的な要素として、いま一つ「力のつく」という要素に配慮しなければならない。その教材を通して、どのような国語の学力を育成するのかということは、素材発掘の段階でしっかりと押さえておくべきである。それがそのまま教材の目標となり、さらに評価にも直結する。魅力溢れる教材とは、具体的にはこのような「楽しく、力のつく」という原点に立つ教材を意味している。そのような教材を開発するために、様々な国語教育の戦略が必要であった。

教材開発の際に最も重要なことは、学習者の現実を的確にとらえるということである。学習者の生活する「いま、ここ」をしっかりと見詰めて、彼らの現実を正しく理解しておきたい。彼らが関心を寄せる漫画やアニメーション、音楽、映像、テレビゲーム、携帯電話などに広く目を向けて、国語科の教材として成立する境界線上に位置付けるという試み

を続けてきた。多くはサブカルチャーと称されるそれらの素材は、学校の価値観からすれば決して授業に馴染むものではない。しかしながら、学習者の現実と向き合ったとき、どうしても取り上げざるを得ない素材でもあった。「楽しく、力のつく」という文脈の中へ位置付ける努力をしつつ、そのこと自体を国語教育の戦略の範疇に含めて考えてきたことになる。

戦略的教材開発に必要な不可欠なものは、やはり教師の不断の努力である。現場の業務量の多さによる多忙を理由に、教材開発にかける情熱を後退させてはならない。いわゆる「定番教材」が教科書に残る理由が教師の多忙にあるとしたら、それは寂しいことである。教師は、新たな教材の発掘に全力で取り組むべきではあるまいか。そして「定番教材」を扱うことになった場合には、ぜひとも斬新な指導法を工夫してみたい。

国語科の教師は特に視野を広くして、学習者が興味・関心のある領域をも視野に収めるようにしたい。なおかつ情報を仕入れるアンテナを精一杯高くして、教材開発に直結するための様々な情報を収集する必要がある。こうして、常に魅力溢れる授業のための教材開発の基盤をしっかりと築いておきたい。

国語教育の戦略は常に更新される。一つの戦略が絶対的な効果を長く保ち続けるということはない。時の流れとともに見直され、改訂されるべきものである。そのためにも、ぜひ新教材の可能性およびそれをを用いた授業の可能性に関する情報を交流したい。ことさらに「戦略」と称するまでもなく、全国の現場の担当者はそれぞれが様々な工夫を凝らした教材開発を展開しているはずである。その具体的な実態を記述し、交流することによって、新たな戦略を次々と生み出すことができればよい。本節では、中学校および高等学校の教育現場へのアンケート調査結果に基づいて、国語科の教材開発のための観点を提案してきた。サブカルチャー系列の教材化を試み、その教材を用いた授業の実際について、以下の章で具体的に論述する。

注

- ¹ 佐藤学は『「学び」から逃走する子どもたち』（『世界』1998. 1）、「子どもたちはなぜ『学び』から逃走するか」（『世界』2000. 5）、『「学び」から逃走する子どもたち』（岩波ブックレット、2000. 12）などの論文において、様々な実態調査を踏まえつつ、子どもたちの「学びからの逃走」について言及している。
- ² 町田守弘『国語教育の戦略』（東洋館出版社、2001. 4）、『国語科授業構想の展開』（三省堂、2003. 10）において、「境界線上の教材」を用いた具体的な実践を紹介している。
- ³ 本田和子『変貌する子ども世界』（中央公論社、1999. 7）。
- ⁴ 第1次調査に携わったメンバーは、猪之原総一、川島みゆき、岸圭介、後藤麻美、嶋貫理恵、菅間智里、橋爪布由、山木めぐみ、の8名である。
- ⁵ 田近洵一編著『子どものコミュニケーション意識』（学文社、2002. 3）に、調査結果が詳しく報告されている。
- ⁶ 同じ趣旨の調査結果として、中村泰子の『「ウチら」と「オソロ」の世代』（講談社文庫、2004. 7）では、女子高校生の実態調査の結果が報告されているが、「携帯の使い方」という問いに対しては「メール」という回答は79%あった。
- ⁷ 第2次調査に携わったメンバーは、坂本邦人、篠田理佳子、田邊一奈、野上茉莉絵、水上さやか、の5名である。
- ⁸ 第3次調査に携わったメンバーは、遠藤史博、菊地恭平、斎藤真子、中川甲斐、安木裕香織、の5名である。

-
- ⁹ 「とても思う」と「まあまあ思う」とを合わせた数値である。以下同じ。
- ¹⁰ 府川源一郎「ケータイ作文の可能性」（日本国語教育学会『月刊国語教育研究』2003. 7）。
- ¹¹ 2004年8月10日に開催された日本国語教育学会第67回全国大会の大学分科会では、「マルチリテラシー」をテーマとしたシンポジウムが実施された。
- ¹² 土井隆義『「個性」を煽られる子どもたち』（岩波ブックレット、2004. 9）。続く引用は同書32ページより。
- ¹³ 携帯電話のメール機能を、作文指導との関連から論じた提言として、府川源一郎「ケータイ作文の可能性」（日本国語教育学会『月刊国語教育研究』2003. 7）がある。